

農林水産大臣賞

『あげパンとぼく』

栃木県栃木市立栃木第三小学校 六年二組 男子 高橋 征吾

「なんだこれ？変なパンが出る!!」

これは、ぼくが小学校に入ってはじめてこんだて表の中から「あげパン」を見つけた時の感想だ。

ぼくは、生まれた時から皮心が弱く、いつも赤く皮がむけていた。いたがゆさからなのか、夜もねつけず、ずっとだっこされたままねていたそうさ。毎日の着がえでさえ、赤くむけた皮心が服にくっつき、ゆっくりとしん重に服をぬがして着がえさせていたと言っていた。それが食物アレルギーによるものだと分かる、母乳だったから、母もぼくのダメなものを食べずにがんばったそうさ。食べ始めると何でもおいしそうに食べたが、食べるもの食べるものみんなアレルギー反応が出てしまい、何をどのくらいどうやってあげたら良いのかと母はともなやんだそうさ。毎日通う公園にもたくさんお友達はできたけど、ぼくだけおやつは母の手作りか干しイモばかり。友達のおやつをほしがった時は、つらかったと言っていた。

そんなぼくも、母のおかげで小学校へ入学するころには、みんなと同じものを食べられるまでになっていた。でも、それまで他人とちがうものばかり食べていたぼくにとって、給食のこんだては、まさに未知とのそうごう。知らないメニューばかりで、いったいどんな味かするのかさえ分からなかった。

そこに登場したのが『あげパン』だ。その時すぐにカレーパンをイメージできれば良かったのだが、ぼくはまだカレーパンも食べたことがなかったから、真っ先に頭にうかんだのは『天ぷら』だった。天ぷらとパンという組み合わせは、なんともまずそうだった。

ついに『あげパン』なるものが給食に出てくる日になった。配られたパンを見て、びっくりした。白っぽいベージュの粉がかかったパンだったからだ。のちに、その粉はきな粉だとわかるのだが、一口食べてみるまでのこわさは今でも覚えている。そして、やっと一口食べてみた時、口の中にじんわり甘さが広がってあまりのおいしさに思わず、

「おいしい!!」
と、口に出してしまったほどだ。ぼくのイメージしていた『天ぷらあげパン』とは全くちがっていた。

ぼくは小学校へ入ってから、ずっとこんな感動を受けながら給食を食べてきた。今でも月に一、二回は別メニューになるが、ほぼ皆と同じものを食べている。家では見向きもしなかった食べ物も、ただの食べすぎらいだと何とも気付かせてくれるのも給食だ。ぼくにとって給食は、食べることへの自信をつけてくれている。食べられるものがなかったぼくにとって、食べられる喜びは大きい。

「あげパンさん、ごめんなさい。君はとってもおいしいよ。」